

特集：感染症に備える

鳥取県立図書館発 新型コロナウイルス対応レポート

松田 啓代

はじめに

7月20日現在、鳥取県の感染者数は5例と少ない状況なのでどこまで参考になるかわかりませんが、鳥取県立図書館のこれまでの新型コロナウイルス対応の概要をレポートいたします。

鳥取県の感染症（ハンセン病）の歴史

まず、レポートの前に、外してはならない感染症の歴史が鳥取県にはあります。国によるハンセン病患者の強制隔離政策に従って「無らい県運動」を徹底してきた過去があるのです。この反省をもとに「ハンセン病問題」を風化させず、ハンセン病問題を考える拠点として、鳥取県立図書館近くの広場に「碑」が建立されています。関連して当館の郷土資料室に、ハンセン病問題啓発資料コーナーを設置しています。

鳥取県の新型コロナウイルスの感染に関する報

道をお聞きになった方でお気づきになられた方があるかもしれませんが、過去の歴史の反省をもとに人権に配慮したものだといえます。歴史に学び、人権に配慮しつつ、新型コロナウイルスに対峙していくことが重要だと考えています。また、この新型コロナウイルスと闘った記録を後世のためにしっかりと保存しておく使命があります。

感染症と闘った事実、そのときの人々の思いを保存し、いつでも誰でも閲覧できるように整備しておくこと、それが図書館の使命です。

感染症の状況によって社会が大きく揺れる中、医療サイド、経済活動サイドのどちらにも偏りのない機関として、様々な最新情報を提供し、また保存していく図書館の存在は重要であると思います。

今、正しいと思われる知識、情報が後で修正されることもあるのです。未知の新型コロナウイルスで不安な状況の中において、人権を尊重しながらも、感染症を予防していくことが必要です。

未知なるウイルスを前にして

昨年12月に中国の武漢から発生したと言われている未知の新型コロナウイルスが、瞬く間に世界に広がり多くの死者を出しました。ワクチン開発も早く2年後と予想される中、2月27日、鳥取県立図書館では課長係長会議を開催しました。コロナ禍の当初は、特定天井耐震化工事で休館中でしたが、工事終了後の3月18日以降、サービス制限をせざるを得ない状況が考えられる中、いかに「県民に役立ち、地域に貢献する図書館」という鳥取県立図書館のミッションを実行していくかを協議

